

清代八股文の題目について

The Forms of Qing Dynasty 'Eight-legged' Essay Topics

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

ABSTRACT

This paper explores the forms of “eight-legged” essay topics in the second half of the Qing dynasty. The eight-legged essay that had been developed in the Ming dynasty underwent change in the Qing dynasty as a result of “technological” developments in preparing for examinations, leading to a trend whereby candidates came to answer examination essays in a detailed and mechanical manner. Examination topics were divided into several categories and moreover several alternative answers were worked out beforehand. This essay is the first part of a research project designed to understand the overall situation concerning the way eight-legged examination questions were answered during the Qing dynasty. Accordingly, this essay will explore the basis on which the question forms of Qing dynasty eight-legged essay topics were divided into different categories, as well as the issue of how answers were worked out beforehand for different categories of essay topic.

題目とは題名ともいい、八股文の問題文のことである。大きく「小題」と「大題」とに分けられる。啓功（一九一二年～ ）はその区別を次のように言う。

字数の少ない題を、また「小題」と称し、長句あるいは全章の題を称して「大題」とする（「八股文形式的解剖」一 題目・『説八股』・九頁：中華書局一九九四年刊）。

光緒三十年（1904）甲辰恩科の一甲三名の進士であった正白旗漢軍の商衍鎰

(一八七三年～?)によると、「大題」は、主に郷試・會試において出題され、「小題」はそこにいたるまでの試験で主に出されたようである。

文題(題目)に大題・小題の分有り。郷・會試は毎に大題を出し、較や整齊爲り、小考は則ち纖佻瑣碎なる者居多、之を小題と謂う(『清代科舉考試述録』第七章 八股文、試帖詩概紀及舉例釋義 第三節 八股文之文題・二三五頁:生活・讀書・新知三聯書店・一九八三年第二次印刷)。

また、商衍鎰は、こうした題目について、次のように述べる。

文題(題目)は乃ち作文(八股文作成)の標識なり。八股 初めの時の出題は、皆な明白正大にして、或いは一句あり、或いは數句あり、或いは一節あり、或いは全章ありて、並びに偏全・承上・冒下・截上・截下等の名目無し。後、之を行なうこと既に久しく、題目 僅かに『論語』・『大學』・『中庸』・『孟子』の四書の内に限られ、幾んど習見を爲さざるの題無きを以て、其の弊 互いに相い蹈襲するに至り、熟を避け生に就かざるを得ず。因りて割裂變化し、繁簡紛歧し、特別殊異の題を創爲す。題 既に多端なれば、行文する者は同じからざるの試題を挙げられ只だ固定の一法のみを用うる能わず、復た時に随いて其の法を變易して定める無きの試題に應付する能わず。是を以て出題する者、各類の名目を定め爲して以て之に統屬さし、某類の題に對して、當に某種の法を用うべく、加うるに規範を以てし、示すに準則を以てし、限制束縛す。明より清に至るまで、其の由り來る所、並びに一日に非ず。應試の士子 遵循し廢せず、遂に普通の格式・講誦の階梯と成す(『清代科舉考試述録』第七章 八股文、試帖詩概紀及舉例釋義 第三節 八股文之文題・二三四頁～二三五頁:生活・讀書・新知三聯書店・一九八三年第二次印刷)。

清代になり『四書』という限られた範囲からという条件のために、問題が複雑化することで、それに対する解法も発展して固定化されたというのである。

大題は題目に即して解答してゆけばよかったのであるが、小題の回答方法は約束事が多く、そこから外れることはできなかったようだ。

行文は意を用いて必ず須く題を按ずべし。大題は以て直抒胸臆し、題に就きて發揮す可し。……小題は各々同じからざるの作法有りて、拘牽 甚だ多く、稍や一たび馳騁すれば、即ち題の忌に觸る（『清代科舉考試述録』第七章 八股文、試帖詩概紀及舉例釋義 第三節 八股文之文題・二三六頁：生活・讀書・新知三聯書店・一九八三年第二次印刷）。

小題の場合は、ある題目が出されると、その形式のものの解法にしたがって八股文を書いて行かなければならない。つまり、八股文を作成するためには、先ず題目がどのような形式であるのかをしっかりと判断しないといけなかったのである。

安邑（山西運城県）の貢生であった王企岵は『文家模範』（乾隆丙戌三十一年〔一七六六〕刊）で次のように述べている。

一審題：作文の題目 手に到りて、即ち如し此の題 曾て來って識面せざる者なれば、定めて一段の新しき意思を構出す。新しき議論 出で來れば、此れ王象春訣（すばらしい）なり。且つ此の題を見るに、或いは上文に跟（したが）うあり、或いは下文を含むあり。[また] 實字^みを見て如何に解釋し、虚字 如何に體會するか、聖賢 如何にして別字を用いず而して此の一字を用うるか、如何にして一直に説下せずして而して「之」「乎」「也」「者」等の字を以てするか。抑揚開轉して來る。即ち此れ便ち精神の在る所を討出するなり……（『文家模範』附先高王父庭訓數條・二葉～三葉）。

また、乾隆七年壬戌科（一七四二年）二甲二名の進士の張泰開（江蘇金匱の人・？～乾隆三十九年九月・八十六歳⁽¹⁾歿）は、題目を次のようにとらえるべきだという。

（1）龐鍾璣による同治五年（一八六六）八月の識語には、次のように言う。

錫山の張有堂（張泰開）先生 畿輔を視學する時（順天學政：乾隆十五年〔一七五〇〕～乾隆十八年〔一七五三〕在任）、刊して以て諸生に示す者なり。[それらは]皆な前人の論文の旨を取りて、其の今に宜しき者を擇びて之を言い、明白に曉暢す。童蒙 悟る可く、[八股文の]名家 亦た其の範圍を出でる能わず、誠に舉業の正軌なり……（張泰開『論文約旨』不分卷・十六葉）。

題に長短・分截・翦頭・去尾・搭截・偏全の同じからざる有り。書の理則ち一なるも、題は則ち至り變づ。作者 一題を拈じ、須く其の精神の何れの處に在るかを審にすべし。題の神の上文に在る者有り、題の神の下文に在る者有り、實處に在る者有り、虚處に在る者有り、數句にして専ら一句に注ぐ者有り、^{そそ}數字にして専ら一字に注ぐ者有り。審題 既に明らかにして、然る後に目を閉じて静思し、此の題は當に如何に安頓し、如何に出落すべきか、如何なるが是れ正旨、如何なるが是れ陪客（そえもの）、題中の肯綮、題外の神情、心目に了然たりて、然る後に筆を下せば、則ち文 能く肖題（題意に即す）し、膚套（不充分）の患い無し（張泰開『論文約旨』不分卷・一葉）。

さて、商衍鎔は題目を次のように分類する（『清代科舉考試述録』第七章 八股文、試帖詩概紀及舉例釋義 第三節 八股文之文題・二三六頁：生活・讀書・新知三聯書店・一九八三年第二次印刷による）。

[大題] 連章題（兩章或三四章合題）・全章題・數節題（每章内之數節）・一節題・數句題（每章或每節内擇取數句）・單句題・兩扇三四五扇題（章節中之排句）

[小題] 截上題・截下題・截上下題・承上題・冒下題・承上冒下題・半面題・上全下偏題・上偏下全題・上下俱偏題・截上兼下全・截下兼上全

[例外（截塔題）] 長搭・短搭（字句少者爲短搭，字句多者爲長搭）・有情搭・無情搭・隔章搭

また、盧前は、『八股文小史』（第二章 八股文章之結構・十三頁～十八頁・一九三七年商務印書館刊）において次のように分類する。

單句題・通節題・通章題・雙扇題・三扇題・三扇通串題・四扇題・五扇題・截上題・截下題・截上下題・承上題・結上題・冒下題・單句截下題・單扇截下題・上完下截題・上截下完題・上全神下半面題・上偏下全題・上全下偏題・上下偏中全題・兩扇截上題・兩扇參差截作題・兩扇分輕重題・隔章無情截作題・隔章有情截作題・上下偏題・上下兩截題・滾作題・截作題・

半面題・半面滾作題・上完下載中宜側串題・上完下載中宜消納題・一頭兩脚截作題・兩頭一脚截作題・承上截下題・截搭題

ただし、こうした分類はいろいろとあったようだ。榆山（山東新泰県）の孫伯龍は、次のように分類する。⁽²⁾

倒綱題・順綱題・首尾兩綱題・排聯題・上輕下重題・上重下輕題・上完下載題・上割中完下載題・平中側舉題・平列側注題・中實題・截題・兩截題・長兩截題・連句題・疊句題・隔章題・連章題・虛冒題・實結題・一頭兩脚題・半面關動題・頓跌題・截上題・截下題・截上下題・足上題・承上題・結上題・單扇題・兩扇題・三扇題・比例題・援引題・稱述題・攻辨題・駁辨題・枯窘題・姓名題・記事立案題・論斷題・記言題・虛縮題・縮脚題・疑問題・驚訝題・偏全題・割截題・口氣題・鄙俚題（光緒丁亥〔一八八七年〕『時文輯要』慎修齋瑣言・「論題法」条・一葉～二葉）。

王企岬は次の三十五種に分類する。

單句題・二扇題・三扇題・二句滾作題・兩截題・截上題・截下題・截上下題・虛字冠首截上題・虛字冠首截下題・上偏下全題・上全下偏題・上偏下偏中全題・搭題・橫擔題・立綱發明題・順綱題・倒綱題・虛冒題・結上題・過脈題・覆述題・記事題・叙事題・叙事夾論斷題・引証題・口氣題・比體題・興語題・正喻問出題・遊戲題・枯窘題・段落題・全章題・連章題（乾隆丙戌三十一年〔一七六六年〕刊『文家模範』）

拙稿では、王企岬が『文家模範』（乾隆丙戌三十一年刊）で行なった分類・説明を中心として、それぞれの題目の特徴を見てゆきたい。そして、各分類・説明の前に、各題目の実際例としてどの部分が題目となったのかを反転文字で一例、分かりにくいものは二例を示しておく。反転文字の箇所のみが、受験生に出題されるのである。さらに、題目のどの文字に着目して文章を作ってゆくかを示した『小題折字』・『時文輯要』に用例があるものは、その箇所も引用する。

（2）孫伯龍はこのように分類した後に、「題の名目　以て枚舉し難し。餘は例もて推す可し」と述べている。

また、この題目であればこのような形式の八比（八股文中のいわゆる八股の部分）を書くというように、かなり厳密な解法がある。それは『文家模範』においても説明がなされている。だが、拙稿ではそうした箇所は引用しない。これについては、稿を改めて述べるつもりであるからである。

なお、(9) 虚字冠首截上題と (25) 叙事夾論斷題とについては、適当な問題文が見当らなかったで、題目の例文は示すことはできなかった。

(1) 單句題

一句を取り出して問題文としたもの。張泰開も「時藝（八股文）は最も單題に難し」（『論文約旨』不分卷・三葉）という郭青螺の言葉を引用し、また趙國麟（康熙四十八年〔一七〇九〕己丑科三甲八十名の進士）も「諸體中 此れ（單句題）最も難し爲す」（『制義綱目』不分卷・二葉）と述べる。

◎子謂子貢曰：女與回也孰愈。對曰：賜也何敢望回，回也聞一以知十，賜也聞一以知二。子曰：弗如也，吾與女弗如也（『論語』公治長）

先ず「回」「賜」を提し、次に「望」字を出し、次は「敢望」を出し、次は「何敢望」に轉づ（光緒己卯（五年）刊『小題折字』三十四葉）。

單句題：語勢 完足にして、各々本等（本来）の理解・議論有り。須く實に靠り發揮すべし。然れども題字に虚・實有り。實字 義理を暢發し、虚字 神情を揺曳す。淺・深有り。淺なる者は其の大概を指陳し、深なる者は其の精微を刻畫す。反正①有り。先ず反し後に正す。開合②有り、合せんと欲して必ず開く。賓主③有り。賓に借りて主を形す。順逆有り④、題

順に當れば則ち順、題 逆に當れば則ち逆、然らば順逆 亦た須く錯綜し、雷同を得ざるべし。詳畧有り、輕なる者は畧し、重なる者は詳しくす。疎・密有り、密なれば則ち義意 周匝（周到）、疎なれば則ち神氣 流宕（流れ出る）。頓挫抑揚有り。側面有り。對面⑤有り。題前に提有り、伏有り。題後に推廣有り。詠嘆有り。題に因りて運化す。其の變 百出す。初學 先ず此の種の題より入手す。此の種 明白なれば、則ち他の題 俱に破竹の

如し（『文家模範』三葉）。

- ①昔人 布局を論じて「原」「反」「正」「推」の四法有り。「原」は以て題端を引き、「反」は以て題勢を作し、「正」は以て題位を還し、「推」は以て題蘊^{ひら}を闡く（道光二十四年甲辰〔一八四四〕科二甲九十二名の進士の劉熙載〔嘉慶十八年（一八一三）～光緒七年（一八八一）〕『藝概』卷六）。
- ②此の意を明らかにせんと欲して、先ず彼の意に即きて以て之を發するを「開」と曰う。既に彼の意を明らかにして忽ち前の意に接して以て之を印すを「合」と曰う（『制義綱目』不分卷・二十六葉）。
- ③語中に賓主有り〔割注：唐虞之際（「唐虞之際，於斯爲盛」『論語』泰伯）の二句、先ず「唐虞」を説き、後に「斯」を説く。此の語中の次第賓主なり〕。意中に賓主有り〔割注：語 先ず「唐虞」を説くと雖も、意は却って「斯盛」を言うを重んず。此れ語中の次第 賓主なり〕（『制義綱目』不分卷・八十葉）。
- ④「文の順逆は、題に因りて名づく。順とは題首より通し下り去く。逆とは、題末より繞し上り來る」（『藝概』卷六）。また、「上より以て下を包むを順と爲し、下よりして上を包むを逆と爲す」（『制義綱目』不分卷・八十二葉～八十三葉）。
- ⑤〔「其爲人也孝弟」（『論語』學而）条についていうと〕父兄は是れ自己の對面。父兄の孝弟は自己の孝弟の對面（道光九年『十四層啓蒙捷訣』集上・十四葉）。

(2) 二扇題

二扇題は、章や節の中の二句が排句となつていところを問題文としたものである。

◎孟子曰：天下之言性也，則故而已矣，故者以利爲本，所惡於智者，爲其鑿也，如智者若禹之行水也，則無惡於智矣，禹之行水也，行其所無事也，如智者亦行

其所無事，則智亦大矣，**天之高也**，**星辰之遠也**，苟求其故，千歲之日至，可坐而致也（『孟子』離婁下）

先ず「高」「遠」を提し、次に「天」と「星辰」とを出し、後に「之」字「也」字に頓る（『小題折字』百六十二葉）。

◎子曰：**知者樂水**，**仁者樂山**，知者動，仁者靜，知者樂，仁者壽（『論語』雍也）。

二扇題：單句題は一篇を敷衍し，反正・虛實・倒順・賓主は，兩股毎に一變す。二句題（二扇題）は兩大股を敷衍し，反正・虛實・倒順・賓主は，俱に一股の中に於いて之を具う……（『文家模範』三葉）。

(3) 三扇題

三扇題は，章や節の中の三句が排句となっている箇所を問題文としたものである。

◎顏淵・季路侍。子曰：盍各言爾志。子路曰：願車馬・衣輕裘，與朋友共，敝之而無憾。顏淵曰：願無伐善，無施勞。子路曰：願聞子之志。子曰：**老者安之**，**朋友信之**，**少者懷之**（『論語』公冶長）

三扇題：三扇 三平にして，平列を以て正と爲す者有り，「老者安之」（『論語』公冶長）の類の如きはなり。……上の一層の重く，下の兩層の軽く，上の一層を將って別に〔八股文中において〕二股を作り，下の二層もて分かちて〔八股文中において〕二股を作る可き者有り，「畏天命」①三句の類の如きはなり。上の二層の軽く，下の一層の重く，上の二層を將って分かちて〔八股文中において〕二股を作り，下の一層もて別に〔八股文中において〕二股を作る可き者有り，「明明徳」②三句の類の如きはなり。三層の蟬聯（連続する）して下り，輕重を分かつたざる者有り，「純如也」③三句の類の如きはなり。一層の深く一層に似て相承けて下る者有り，「可與共學」④章の類の如きはなり……（『文家模範』四葉）。

①孔子曰：君子有三畏，**畏天命**，**畏大人**，**畏聖人之言**，小人不知天命而不畏也，狎大人，侮聖人之言（『論語』季氏）。

②大學之道、**在明明德**、**在親民**、**在止於至善**（『大學』經・第一節）。

③子語魯大師樂曰：樂其可知也，始作翕如也，從之**純如也**，**皦如也**，**繹如也**，以成（『論語』八佾）。

④子曰：**可與共學未可與適道**，**可與適道未可與立**，**可與立未可與權**（『論語』子罕）。

(4) 二句滾作題

滾とは、「題の滾説なるものなり」（『制義綱目』不分卷・四葉）というように、ひとまとめに談ずるものである。内容が密接にかかわりあっている箇所を問題文とする。

◎子擊磬於衛，有荷蕢而過孔氏之門者，曰：有心哉，擊磬乎，既而曰，鄙哉，硜硜乎，莫己知也，斯己而已矣，**深則厲**，**淺則揭**。子曰：果哉，末之難矣（『論語』憲問）。

二句滾作題：題句 分かつと雖も、題氣⁽³⁾ 甚だ緊なり。題 緊にして文分かてば、則ち緊なる者は緊ならず。故に必ず滾を以て之を出だす。……捻じて宜しく平列對舉すべからず。此れ定法なり。「深則厲」二句①・「事齊乎」二句②等の題の二つの「則」字・「乎」字の如きは、合説③に非ざれば其の神を得る能わず。其の間の虚實・淺深・顛倒・變化は、其の人に存す（『文家模範』四葉～五葉）。

①子擊磬於衛，有荷蕢而過孔氏之門者，曰：有心哉，擊磬乎，既而曰，鄙哉，硜硜乎，莫己知也，斯己而已矣，**深則厲**，**淺則揭**。子曰：果哉，末之難矣（『論語』憲問）。

(3) 題氣について、『制義綱目』では、次のように説明する。

題とは、文の體なり。……題 胡ぞ以て體有らん。曰く、理は形無き者なり。言は形有る者なり。形無きの理を以て形有るの言を爲し、而して體 以て焉に生ず。題 又た胡ぞ以て氣有らん。曰く、言は定め有る者なり。意は定め無き者なり。定め有るの言を以て定め無きの意を傳え、而して氣 以て焉に行く。體 氣を載せ、氣 體を寓す。二者未だ嘗て相い離れず、亦た未だ嘗て相い混ぜず……（『制義綱目』不分卷・一葉）。

②滕文公問曰：滕，小國也，間於齊・楚，**事齊乎**，**事楚乎**（『孟子』梁惠王下）。

③合とは、「既に彼の意を明らかにして、忽ち前の意に接して以て之を印すを合と曰う」（『制義綱目』不分卷・二十六葉）。

(5) 兩截題

意味の続いている上下句の箇所を截断して問題文としたもの。

◎孟獻子曰：畜馬乘，不察於鷄豚，伐冰之家，**不畜牛羊**，**百乘之家**，不畜聚斂之臣，與其有聚斂之臣，寧有盜臣，此謂國不以利爲利，以義爲利也（『大學』傳十章・第二十二節）

◎祭於公，不宿肉，祭肉**不出三日**，**出三日**，不食之矣（『論語』鄉黨）

兩截題：截なる者は斷なり。開なり。斷にして藕 斷つも絲は乃ち連なり，開にして璋 判けるも圭は仍お合う（表面上は関係は絶えているようでも，実際は繋がっている）。故に上下 中に分還し，上は須く下を按ずべく，下は須く上を顧みるべし……（『文家模範』五葉）。

また，唐彪（字は翼脩。明經をもって會稽・長興・仁和の訓導に任ぜられる。黃宗義・毛奇齡に問学したという〔嘉慶『蘭谿縣志』（卷十三 上 文學・四十八葉）による〕）も次のように述べる。

姚立方 曰く，……〔兩截題は〕一律に論ず可からず。或いは上 重く，下 軽く，下截は只だ上意を承くるのみなる者は，當に上に詳しく下を畧にすべし。上 軽く，下 重く，上句は下句に因りて發する者は，當に下に詳しく上を畧にすべし。又た當に輕重に相（したが）いて以て行文すべきなり，と（『讀書作文譜』卷之八・十六葉～十七葉）。

(6) 截上題

上の句を截断して問題文としたもの。

◎子曰：温故而知新，**可以爲師矣**（『論語』爲政）

截上題：本より上文有るも、命題（出題）する者 之を截つ。是れ截住（截つのを^{やめ}を住る）にして、截去（截ち去る）に非ざるなり。此れに拈（出会う）する者、上を割く^さを要す。又た上を粘（くつつける）するを要す。蓋し上を割かざれば、則ち上文を牽連し、題理〔に合う〕有りて題位〔に合う〕無し。上を粘せざれば、則ち上文を抛荒（ほったままにしておく）し、題位（題目の規則）〔に合う〕有りて題理〔に合う〕無し……（『文家模範』五葉）。

章中如は次のようにいう。

此の題 最も上に連なるを忌む（章中如『清代考試制度』清代科舉制度下巻・文法・五頁・一九三一年黎明書局刊*盧前『八股文小史』第二章 八股文章之結構・十四頁・一九三七年商務印書館刊も同じ）。

（7）截下題

下の句を截断して問題文としたもの。

◎棘子成曰：君子質而已矣，何以文爲。子貢曰：惜乎，夫子之説君子也，駟不及舌，文猶質也，質猶文也，虎豹之鞞猶犬羊之鞞」（『論語』顔淵）

先ず「夫子之説」に傾り、次に「惜乎」に翻轉す（『小題折字』七十四至七十五葉）。

◎曾子曰，吾聞諸夫子，人未有自致者也，必也親喪乎（『論語』子張）

先ず「人」字を出し、次に「致」字を出し、次に「自致」を出し、次に「未有」を出し、後に「者也」二字に傾る（『小題折字』一百三葉）。

截下題：……凡そ題に神氣有り、部位有り。截下題も亦た然り。〔この題目によって八股文を〕作る者は、處處に下〔句〕の意を逆取し、本位に縮入し、〔題目に基づいて〕本句を作ると雖も、意は已に即離隱躍（つかずはなれずはっきりしない）の間に在り。是れ神氣有りて、下〔句〕の意 已に明明と透起（うかびあがる）すと謂うなり……（『文家模範』六葉）。

章中如は次のようにいう。

此の題 最も下を犯すを忌む。而して又た下を照らすを要し、方めて下に^{はじ}

背かず（章中如『清代考試制度』清代科舉制度下卷・文法・五頁・一九三一年黎明書局刊＊盧前『八股文小史』第二章 八股文章之結構・十四頁・一九三七年商務印書館刊も同じ）。

路徳は、⁽⁴⁾『時藝話』で、截下題として「道之」（子曰：道之以政，齊之以刑，民免而無恥，道之以徳，齊之以禮，有恥且格〔『論語』爲政〕）を取り上げ、その模範解答を示し、最後に次のように解説する。

問う截下題を作るに下文を照（かえり）みず、但だ本題（題目）のみを詮（解釈）するは可なるか、と。曰く不可なり。先ず截下題の〔出題形式によって書かれた〕文（八股文）を正すに、斷じて未だ下を照（かえり）みざる者有らず。〔しかし〕下を照みるを以て能と爲すに非ざるなり。〔ただし〕下を照みざれば便ち是れ本題（題目）ならず。何となれば、下文 動かざれば則ち題氣（題目のいきおい）出でず。下文 照み得て眞ならざれば則ち題氣 眞ならず。此の題（「道之以政」）の二字と下文の二字（「道之以徳」）との如きは、本と定めて一句たり。今、祇だ半句を以て題と爲す。自ずから全句と廻（はるか）に別あり、此れ題界（題目の範囲）なり。纔かに上半句（「道之以政」）を説くも、便ち下半句（「道之以徳」）有り、此れ題氣なり。下文を侵占すれば、便ち題界無し、下文を隔斷すれば、便ち題氣なし。能く下を照（かえり）みて、便ち下を隔てず、能く題を勘えて、便ち下意を犯さず。中に下半句（「道之以徳」）有り。口中 祇だ是れ上半句（「道之以政」）のみ。〔そうであれば〕題氣 眞にして題界 混ぜず、斯れ之（模範的な解法）を得、と（咸豊丁巳刊『時藝話』巻一・十八葉～十九葉）。

（4）商衍鑒は、嘉慶十四年（一八〇九）己巳恩科二甲七十七名の進士である路徳について次のように述べている。

陝西の路徳に「仁在堂全集」有りて最も著稱さる。路徳 道光四年（一八二四）より起きて即ち試文を以て徒に課すこと、先後約二十年なり。歴年 對山・乾陽・關中・象峰・宏道の各書院に主講となる。……教えを其の門に受ける者は科名極めて盛んにして、其の稿 各省に通行し、家に一篇を置くに幾し……（『清代科舉考試述録』第七章 八股文、試帖詩概紀及舉例釋義 第五節 八股文之選本、稿本・二四八頁：生活・讀書・新知三聯書店・一九八三年第二次印刷）。

路徳も、截断された下句を参照しなければならないが、それだけではいけないというのである。

(8) 截上下題

上下文ともに截断して問題文としたもの。

◎……冉有曰：今夫顓臾，固而近於費，**今不取**，後世必爲子孫憂……（『論語』季氏）

先ず「取」字を出し、次に「不取」を出し、後に「念」字を寫く（『小題折字』八十八葉）。

截上下題：神氣は上下文に在り。上 粘（くつつける）す可からず、尤も脱す可からず。下 犯す可からず、尤も離る可からず、蓋し脱せず離れざれば、本題の脉理 得。粘せず犯さざれば、本題の界限（主旨） 清なり。其の上を納めて下を吸（吸収）するは、截上・截下題と同じ……（『文家模範』六葉）。 章中如は次のようにいう。

此の題 既に上に連なるを忌み、又た下に觸れるも忌む（章中如『清代考試制度』清代科舉制度下卷・文法・五頁・一九三一年黎明書局刊＊盧前『八股文小史』第二章 八股文章之結構・十五頁・一九三七年商務印書館刊も同じ）。

(9) 虚字冠首截上題

截上題で題目の頭に虚字がくる箇所を問題文としたもの。

虚字冠首截上題：題に既に虚字の冠首有れば、則ち其の虚字は必ず神情有り、又た「虚字は」必ず上の意を承領す。「それなので」方（まさ）に能く托出（持ち出す）す……（『文家模範』七葉）。

(10) 虚字冠首截下題

截下題で題目の頭に虚字がくるものを問題文としたもの。

◎子謂仲弓曰：犁牛之子，駢且角，**雖欲勿用**，山川其舍諸（『論語』雍也）

虚字冠首截下題：此の種の題義は全く下文に在り。篇内 下意を逆起するは、即ち是れ題首の虚字の神情あればなり……（『文家模範』七葉）。

また、唐彪も次のように述べる。

唐彪 曰く、……この種の題義は、全く下文に在り。篇内 下意を逆起すれば、即ち是れ題首の虚字の神情 既に題神を得。[だから] 則ち必ずしも虚字の上に於いて題貌に肖るを求めざるなり。其の虚字は但だ文中の虚字の針鋒（細かなところ）を以て之を激射（筆を走らせる）す。……凡そ題宜しく虚字を將^もって前に發すべき者有り。必ず虚字を將^もって前に發す可からざる者有り。「安見方六七十」①一句題の如きは、「安見」字を前幅に發すれば、落筆 便ち窘^{くる}しむ。縦ひ能く篇を成すも、亦た是れ黄茅白葦（齊一で単調）なり。毫も取る可き無し。惟れ多く「方六七十」字を發して、而して「安見」字は、但だ每股の中に於いて、虚字を以て之を激射すれば、則ち須く闡發すべからずして、神氣 反って十分に透露す。故に虚字冠首截下題の題中の虚字は、必ずしも正發（まともに出す）せず。文中の虚字、最も宜しく講究すべきなり。近ごろ人の虚字題の作法を著す有りて、凡そ題の虚字は皆な宜しく早く前幅に發すべしと謂う者は非なり……（『讀書作文譜』卷之八・二葉～三葉）。

①……安見方六七十如五六十而非邦也者……（『論語』先進）。

（11）上偏下全題

「衆端を統べて之を言うを「全」と曰う。一端を擧げて之を言うを「偏」と曰う」（『制義綱目』不分卷・二十七葉）というように、上が不完全であり、下句がまとまっている箇所を問題文としたものである。

◎子所雅言，詩書**執禮**，**皆雅言也**（『論語』述而篇）

上偏下全題：下截 數項を兼ね頂く、上截 只だ一條を出だす、則ち本題の出だす所の者を以て主と爲し、未だ出さざる所の者もて賓と爲す。上文を

撤却（なげうつ）すれば、既に下截 兼ね頂くの意に非ず。上文を混入すれば、又た上截 偏擧の體に非ず……（『文家模範』七葉）。

（12）上全下偏題

上の部分がまとまり、下が不完全なものである箇所を問題文としたものである。

◎子所雅言、詩書執禮、皆雅言也（『論語』述而篇）

上全下偏題：下截 上より抽出する有れば、必ず發首の句を重んず。方にまさ好く落下の句を轉ずる者なり。「君子無所争 揖讓而升」①等の題の如き是なり。下截を以て主と爲し、上截の軽く遞する者有り。「今天下車同軌」②等の題が如きは是なり……（『文家模範』八葉）。

①子曰：君子無所争，必也射乎，揖讓而升下，而飲，其争也君子（『論語』八佾）。

②今天下，車同軌，書同文，行同倫（『中庸』第二十八章第三節）。

また、路徳は、上全下偏題の「『子曰：性相近也，習相遠也』・『子曰：唯上知與下愚不移』」（『論語』陽貨）の模範解答文を示して、その題目の解法を次のように説明する。

此れ上全下偏題なり。凡そ〔上全下偏〕題の全・偏は、顕らかにして知り易し。惟おもうに此の題（「習相遠也，子曰：唯上知」）の全・偏は、隱にして見難し。上章を以て之を言うに、「性」 氣質を兼ね。氣に清有り，濁有り。質に厚有り，薄有り。「習」の字は善惡を兼ね。「相遠」と言うは、是れ善惡懸絶すればなり。氣の清・質の厚き者，善を習うこと較や易し。氣の濁・質の薄き者，惡を習うこと難からず。若し清にして厚き者の惡を習いて，善を習わざれば，則ち清なる者は濁り，厚き者は薄し。若し濁にして薄き者の善を習いて惡を習わざれば，則ち濁なる者は清く薄き者は厚し。善を習えば，則ち惡より遠ざかり，惡を習えば則ち善より遠ざかる。兩邊 俱に説き到るを要す。單に一邊を説くを得ず。豈に是れ「全」ならざるや。下章を

以て之を言えは、「上知」は是れ氣 極清にして、質 極厚なる者なり。「下愚」は是れ氣 極濁にして、質 極薄なる者なり。極清・極厚なる者は、決して惡を習わず。極濁・極薄なる者は、斷じて善を習い難し。故に「不移」と曰う。「不移」は上知・下愚とを兼ね承け、上知の移らざる（「不移」）は是れ惡に移らず（「不移」）、下愚の移らざる（「不移」）は是れ善に移らざる（「不移」）なり。若し題〔目〕 僅かに「不移」の字を截去すれば、便ち是れ尋常の兩截題なり。今、並びに「與下愚」の三字を截去すれば、則ち上の「習」字「相遠」字、並びに上文の「性」字は均しく不全・不偏に屬す。而るに何ぞ諸卷 但だ此の題の兩截〔題〕と爲すを知るも、上全下偏と爲すを知らず。俱に尋常の兩截題の法を以て之を行なうは、其の疵 百世を累すること怪しむ無きなり（道光丁未刊『時藝階』卷六・三十五葉）。

（13）上偏下偏中全題

中間の部分がまとまり、上下が不完全なものを問題文としたものである。上下の部分重視して解答文を作る。

◎或生而知之，或學而知之，或困而知之，及其知之一也，或安而行之，或利而行之，或勉強而行之，及其成功一也（『中庸』第二十章・第八節）

上偏下偏中全題：……此等の題は、題首の偏 之を補いて全たらしむを要し、題尾の偏 却って題の如く扣住（限定）するを要す、中間は是れ全象と雖も、然れども題は搭體に屬すれば、則ち須く首尾を以て重しと爲すべし……『文家模範』八葉）。

（14）搭題

前句の後と、後句の頭とをくっつけたり、前章の末を切り取り、後章の頭に載せたり、二・三章を飛び越してくっつけたりして問題文とするもの。ある程度、意味が通じているものを「有情」といい、意味が通らないものを「無情」という。

『論語』述而篇

「子所雅言，詩書執禮，皆雅言也」

「葉公問孔子於子路，子路不對。子曰：女奚不曰，其爲人也，發憤忘食，樂以忘憂，不知老之將至云爾」

「子曰：我非生而知之者，好古敏以求之者也」

◎隔章有情搭題：不知老之將至云爾。／子曰：我非生而知之者

◎隔章無情搭題：皆雅言也。／葉公問孔子於子路

搭題：其の體 一ならず。長搭有り，短搭有り。大要は只だ首尾の綯合（結び合わせる）に在り……（『文家模範』八葉）。

（15）横擔題

上下が漠然とした言い方で，中間がはっきりとした意味をもつもの。

◎……吾未聞枉己而正人者也，況辱己以正天下者乎，聖人之行不同也，或遠，或近，或去，或不去，歸潔其身而已矣，吾聞其以堯舜之道要湯，未聞以割烹也……（『孟子』萬章上）。

横擔題：先輩の所謂ゆる中實題なり。題 既に中間を重んじ，此の處を作るを重んぜざれば，要領を得ず。然れども單に此の處を重んじ作るのみなれば，又た首尾を冷落（なおざりにする）すとなり，章法を成さず……（『文家模範』九葉）。

『制義綱目』でも，重要なのは中間であると述べる。

横擔なる者は，兩頭 虚にして，中間 實あるの謂なり。……横擔題は，實意 中間に在り，綱領も亦た即ち中間に在り，故に當に中間を以て兩頭を擔（ひきうける）するなり（『制義綱目』不分卷・十二葉）。

（16）立綱發明題

要点を最初に述べ，続いて具体的に説明してゆく箇所を問題文としたもの。

◎「子曰：孟之反不伐，奔而殿，將入門，策其馬。曰：非敢後也，馬不進也」一

章（『論語』 雍也）

立綱發明題：立綱發明は、「君子無所争」①の類の如きは皆な是なり。此等の題と順綱と相い似たり。但だ順綱の首句は極めて虚なれば、宜しく實作すべからず。此れ（立綱發明題）は則ち首句に自ずから實義有り。實作に妨げあらざる可きなり……（『文家模範』 九葉）。

①子曰：君子無所争，必也射乎，揖讓而升下，而飲，其争也君子（『論語』 八佾）。

『制義綱目』も、次のように述べる。

立綱發明は、先ず一意を立てて綱を作り、下 散語を用いて以て之を發明する者なり。意は順綱に似たるも目無く、形は兩截に分かれるも轉無し。目無くして名を得て綱と爲す者は、下意を以て上を總統するの故なり。轉無く猶お兩層を分かちつがごとき者は、上意を以て發明の始めて盡くすを得るの故なり（『制義綱目』 不分卷・十一葉）。

（17）順綱題

上で要点を述べて、下でそれを列挙する形式のもの。ただし、この要点は、(16) 立綱發明題の要点（實）と異なり、抽象的（虚）なものである。

◎顔淵喟然歎曰：仰之彌高，鑽之彌堅，瞻之在前，忽焉在後，**夫子循循然善誘人，博我以文，約我以禮**，欲罷不能，既竭吾才，如有所立卓爾，雖欲從之，末由也已（『論語』 子罕）

順綱題：上 總舉し，下 條列すれば，則ち順綱なり。順綱の實義 全く目に在り。故に須く軽く綱を發し，重く目を發すべし……（『文家模範』 九葉）。

『制義綱目』では次のように説明する。

順綱は，條目 下に在りて，綱領（要点） 上に在り，順以て之を統ぶる者なり。夫れ總會（あつめる）するを綱と爲し，分列するを目と爲す。總（あつめる）より分かち，上 統べ，下 承く。理勢 甚だ順なり……（『制義綱目』 不分卷・八葉）。

(18) 倒綱題

上で列挙し、下でその要点を述べる形式のもの。

◎孔子曰：益者三友，損者三友，友直，友諒，友多聞，益矣，友便辟，友善柔，友便佞，損矣（『論語』季氏）

先ず「直」「諒」「多聞」を提し、次に三つの「友」字に接して、末に「益矣」に接す（『小題折字』九十葉）。

倒綱題：上 條列し，下 摠承すれば，則ち倒綱と爲る……（『文家模範』十葉）。

『制義綱目』では次のように説明する。

倒綱は，條目 上に在り，綱領（要点） 下に在り，倒以て之を承ける者なり。夫れ總會（あつめる）するを綱と爲し，分列するを目と爲せば，則ち總會（あつめる）は宜しく前に在るべく，分かつは宜しく後に在るべし。〔しかし〕先に總せずして先ず分かつ者は，意を以て綱に注ぐ，或いは先に開きて後に合す①，或いは先に案じ後に斷じ，以て重んずる所の在るを明らかにする是れなり〔割注：「如黙而識之」一節②・「質勝文」一節③は皆な先開後合する者なり。「先進於禮樂」一章④・「齊景公有馬千駟」一章⑤は皆な先案後斷なる者なり。他は類推す可し〕（『制義綱目』不分卷・十葉）。

①此の意を明らかにせんと欲し，先ず彼の意に即きて以て之を發するを開と曰う。既に彼の意を明らかにして，忽ち前意に接して以て之を印すを合と曰う。……開は引に似たる有り。……合は釋に似たる有り……（『制義綱目』不分卷・二十六葉）。

②子曰：如黙而識之，學而不厭，誨人不倦，何有於吾哉（『論語』述而）。

③子曰：質勝文則野，文勝質史，文質彬彬，然後君子（『論語』雍也）。

④子曰：先進於禮樂，野人也，後進於禮樂，君子也，如用之，則吾從先進（『論語』先進）。

⑤齊景公有馬千駟，死之日，民無德而稱焉，伯夷叔齊餓于首陽山，民到于

今稱之，其狀之謂與（『論語』季氏）。

（19）虚冒題

下句の意味を抽象的にあらわしている部分を問題文としたもの。

◎王孫賈問曰，與其媚於奧，寧媚於竈，何謂也。子曰：不然，獲罪於天，無所禱也（『論語』八佾）

虚冒題：虚冒は截下と同じからず。截下は勢い駿馬の坡を下るが如く，以て中止し難し，故に截下を以て名と爲す。虚冒題の若きは，則ち神間氣靜（神氣が安閑としてしずか）にして，只だ是れ下〔句〕を冒^{おお}うのみ，並びに下〔句〕に趨^はしるに非ず。全章・全節の意は，已に本句（虚冒題の出題文）に於いて冒^{おお}い起く。蓋し必ず下文の意の先に在る有りて，而して後に此の句有り。此等の題を作るは，虚を貴び能く映下す。寔に下を犯さざれば，方に高手と稱さる……（『文家模範』十葉）。

『小題正鵠初集』に虚冒題の例題として，

◎子曰：吾之於人也，誰毀誰譽，如有所譽者，其有所試矣，斯民也，三代之所以直道而行也（『論語』衛靈公）

をあげ，その總批で，原評を引用して具体的な解法を示す。

此の虚冒題は，下文の「毀譽」句無し。[そこで] 即ち「於」字の内に從いて包著し，「於」字の神理 却って又た「吾」字・「人」字に從いて討出（引き出す）す。蓋し吾 原より「直道」有り，人も亦た原より「直道」有り。吾 人に於いて直くならざる可からず。人も亦た吾の不直を容れず。此れ毀無く譽無く，一に「直道」に本づき行なう所以なり。然らば此の意は尚お下文に在り。實を占すれば文を得ず。下文の「直道」の意を倒攝して，「吾」字・「人」字の内に籠入し，以て「於」字を講ぶ。故に能く處處に「誰毀誰譽」と對針（対応）す（光緒八年重刊『小題正鵠初集』八十六葉）。

(20) 結上題

文章の結論となっている箇所を取り出して問題文とするもの。『制義綱目』では、「前文に即きて其の意を収めるを結と曰う」（『制義綱目』不分巻・二十三葉）という。

◎……子曰：小人哉樊須也，上好禮，則民莫敢不敬，上好義，則民莫敢不服，上好信，則民莫敢用情，夫如是，則四方之民，襁負其子而至矣，焉用稼（『論語』子路）

先ず「稼」字を出し，次に「用」字を醒し，後に「焉用」を點す（『小題折字』八十二葉）。

結上題：結上は截上に異なる。截上は題中の字 皆な本題の自ら具わる所にして，特に其の根株は上文に在り。結上は，題中の字 多く上文の已に見る所にして，特に其の眼目は本題に在り。且つ截上題は，上文を倒入する處，多くは宜しく著力（力を尽くす）の語を用いるべし。結上題は，上文に鎔鑄（倣う）する處，唯だ當に現成の口吻を以て之に還すべし……（『文家模範』十葉～十一葉）。

また，路徳は次のようにいう。

〔結上題は〕題の實際は全く上文に在り。空しく題面を寫せば，必ず觀る可きもの無し。虚神（形ばかりを）を摹擬すれば，又た俗套に落つ……（咸豐丁巳刊『時藝話』卷二・五十三葉）。

唐彪は，結上題を三種に分類して，次のようにいう。

唐彪 曰く，結上題に三種有り。一は是れ通章の意を結ぶもの。「夫微之顯」①節・「造端乎夫婦」②節の類の如し。此の種の題，若し止だ本題を透發するのみにして，上文の意を收拾する無れば，固より題の神理を得ず。能く上文を收拾すと雖も，其の理を鎔化する能わざれば，本題の面目に歸するも，亦た體に非ざるなり。一は是れ上文の數句の意を結ぶもの。「此之謂絜矩之道」③・「此謂國不以利爲利」④の類の如し。此等の題は，實理を疏ること

前項の題と異なる無し。宜しく上文を脱せず、又た上文を粘（くつつける）せず、不即不離の間に在るを貴ぶべし。……一は是れ上文の意を反結するもの。「君子未有不如此」⑤の如し……〔解法は前の二項と同じ。ただ〕其の同じからざる者は、他の半面の語氣を還すを要し、方めて題の神理を失わざるなり、と（『讀書作文譜』卷之八・十一葉～十二葉）。

①夫微之顯，誠之不可揜，如此夫（『中庸』第十六章・第五節）。

②君子之道，造端乎夫婦，及其至也，察乎天地（『中庸』第十二章・第四節）。

③此之謂絜矩之道（『大學』傳第十章・第二節）。

④此謂國不以利爲利，以義爲利也（『大學』傳第十章・第二十二節）。

⑤詩曰，「在彼無惡，在此無射，庶幾夙夜，以永終譽」。君子未有不如此而蚤有譽於天下者也（『中庸』第二十九章・第六節）。

(21) 過脉題

前を承けて後を啓き、上下を貫通させている箇所を問題文としたもの。

◎所謂平天下在治其國者，上老老而民興孝，上長長而民興弟，上恤孤而民不倍，是以君子有絜矩之道也（『大學』傳十章）。

過脉題：固より是れ復た^あ擧げて以て下文を引起す。然れども本句の寔（實）説に従わず。……此等の題は上文が虚，下文が寔（實）有る者多し。滑口（不注意）にして読み過ごす可きに非ず……（『文家模範』十一葉）。

また、唐彪も次のように述べる。

陳法子 曰く、凡そ過脉題は、其の字面（眼目） 皆な上文より說過す。故に當に題前に在りて翻弄し以て勢いを作るべし。復た正面を實發するを得ざるも、正面は止だ畧ぼ描寫を加えるべし。其の描寫の處は、亦た當に現成の上に在りて説くべし。方に上文と別有り、と（『讀書作文譜』卷之八・四葉）。

(22) 復述題

自分もしくは他人が述べた言葉を繰り返し引用し述べた箇所を問題とするものの。

◎……其僕曰：庾公之斯，衛之善射者也，**夫子曰吾生**，何謂也……（『孟子』離婁下）。

復述題：前に已に說過するを、此に至りて又た一番（いちど）復述（くりかえす）す。其の意は疑う所有るに非ず、必ず未だ盡くさざる所有ればなり。意 疑う有りて復述する者は、宜しく題前に在りて勢を作すべし。意 未だ盡くさずして復述する者は、宜しく題後に在りて推衍すべし……（『文家模範』十一葉～十二葉）。

(23) 記事題

行動を記した箇所を問題文としたもの。内容によって三つに分類される。

◎子曰：孟之反不伐，奔而殿，**將入門**，策其馬。曰：非敢後也，馬不進也（『論語』雍也）

記事題：記事に三種有り。一は下文の爲に立案す。一は是れ下文に論斷（推論して判断する）有り。一は是れ下文に論斷無し……（『文家模範』十二葉）。

また、唐彪も次のように述べる。

張申伯 曰く、記事題は、其の事を以て記す者の筆する所と爲せば、則ち之を記事と謂う、と。記事題に三種有り。陳法子 云う、下文の論斷に連なり来る者は、記事の處 宜しく軽く點過すべし。論斷の處に於いては必ず宜しく詳しく發すべし。若し記事の處 説き得て詳しければ、則ち論斷の處 畧せざるを得ず。便ち輕重の體裁を失す。下文の論斷を截去する者は、只だ他の案（事例）に還し體裁を斷ぜず。若し下文の意に照らして發明すれば、多く下を侵すに至り、竟に題の外に於いて別に議論を立つ。[それは]

又た支離に屬す。先輩 論斷の下に在る有るは、往往にして代法を以て其の人 自ら言うに代え、下文と相い照らして相い侵さず。此れ眞に巧みに法門を避くるを得るなり、と（『讀書作文譜』卷之八・十七葉）。

（24）叙事題

推論して判断する部分が上か下かにある箇所を問題文とするもの。

◎……昔者齊景公問於晏子曰、吾欲觀於轉附朝舞、**遵海而南**、放於琅邪、吾何脩而可以比於先王觀也……（『孟子』梁惠王下）

叙事題：叙事とは、論斷の下に在る者有り。亦た論斷の上に在る者有り。其の論斷の下に在る者は、切に妄りに議論を加え、以て下を侵すに至る可からず。其の法と記事立案題とを以て參用す可し。論斷の上に在るが若き者は、實を舉げて詮發し、上文の論斷の意を將って中に鎔納（とかしこむ）するに妨げあらず……（『文家模範』十二葉）。

（25）叙事夾論斷題

『文家模範』によると、ある事柄を示した後に推論判断する箇所を問題文としたもの。

叙事夾論斷題：先ず指事して而して後に論斷する者なり。上の指事を發する處は、即ち宜しく下の斷意の内に在るを透すべし。下の論斷を發する處は、宜しく上文の事を抱定し寔（實）に講ずべし……（『文家模範』十二葉～十三葉）。

（26）引証題

『詩經』などの他の書物から引用された箇所を問題文としたもの。

◎孟子曰：仁則榮，不仁則辱，今惡辱而居不仁，是猶惡濕而居下也，如惡之。莫如貴德而尊士，賢者在位，能者在職，國家閒暇，及是時，明其政刑，雖大國，必畏之矣。**詩云：天之未陰雨，徹彼桑土，綢繆牖戶，今此下民，**或敢侮予。孔子曰：爲此詩者，其知道乎，能治其國家，誰敢侮之……（『孟子』公孫丑上）。

引証題：他事・他語を引きて以て本意を証するものなり。其の體 一ならず。引く所を將つて全出する者有り、截出して不全なる者有り、正意を先にして引証を後にする者有り、先ず援引し而る後に正説する者有り、即引して斷を爲すも、正意を復説せざる者有り、随説随引し既に復説を引き、參差①間出する者有り……（『文家模範』十三葉）。

①或いは參差あり〔割注：意 對して、語句 對せずを參差と爲す〕（『制義綱目』不分卷・十四葉）。

唐彪も次のように述べる。

唐彪 曰く、引証題は數種有り。單引証題有り。連上下文引証題有り。三四節連引証題有り。之を總するに引証の語は、多く斷章取義なり。其の言或いは此の理・此の事を爲さずして發するも、我 之を引けば則ち此の理・此の事の証左と爲る。故に當に彼の原意を以て主と爲すべからず、當に我 之を引くの意を以て主と爲すべし。此れ必ず知らざる可からざる者なり。〔以下〕其の作法を言う。單引証^{ママ}小題は、解釋・論斷は俱に下に在り、則ち妄りに議論を加うべからず。巧みなる人 毎に代法を用いて口氣に順いて之を作る。蓋し下文を侵すを避けるが爲に然するなり。題〔目〕の正意を先にし而して後に語を引く者は、自ずから當に正意を以て重し爲す。其の引語は是れ証左に過ぎざるのみ。文を作るに須く前路 豫め埋め、後に至りて説き出す。始めより突如せざるなり。題〔目〕の先ず語を引き而して後に正説する者は、引語 只だ宜しく畧して叙し、下文の解釋の義を以て主と爲すべきなり。三四引証に至る者は、宜しく前に提し^{わた}後に繯すを以て、賓を畧して主を詳しくすべし。相勢・點題の諸法は、其の間に控制（調節）し、文に波瀾（起伏変化）有りて平衍（平板）の弊無きを庶幾う、と（『讀書作文譜』卷之八・十七葉）。

(27) 口氣題

話し手の口振りがはっきりとわかるような箇所を問題文としたもの。

◎冉求曰：非不説子之道，力不足也。子曰：力不足者，中道而廢，今女畫（『論語』雍也）

口氣題：題の神に肖るを貴び、題の貌に肖るを貴ばず。[題の] 貌に拘われ肖神（とてもよく似る）なれば、淺路なるを免れず……（『文家模範』十三葉）。

唐彪も、次のように述べる。

王文虎 曰く、口氣題に題中の虚字を挑撥し、口氣をして活動せしむる者有り。是れ明らかに口氣を取るの法なり。題中の虚字を剔（とり出す）せずして、口氣 渾然として中に在る者有り。是れ暗に口氣を取るの法なり。明取は「錐の囊中に處りて、脱穎して出づるが」（『史記』平原君列傳）如し。暗取は寶劍の匣に在りて、光氣 外に溢れるが如し。然れども明取は易く、暗取は難し。明取は暗取の高きに如かざるに似たり、と（『讀書作文譜』卷之八・四葉）。

(28) 比體題

比喩的な箇所を問題文としたもの。明比と暗比とがある。

◎子曰：歲寒，然後知松柏之後彫（『論語』子罕）。

此の體 明暗の二種有り。明比は、正意（本來の意味）の已に上文に見ゆるもの、「譬諸草木」①・「速於置郵」②等の題の如し。暗比とは、正意の章を通じて見えざるもの、「歲寒」③・「驥」章④等の題の如し……（『文家模範』十四葉）。

①……子夏聞之曰：噫，言游過矣，君子之道，孰先傳焉，孰後倦焉，譬諸草木，區以別矣，君子之道，焉可誣也，有始有卒者，其惟聖人乎（『論語』子路）。

②……孔子曰：徳之流行，速於置郵而傳命……（『孟子』公孫丑上）。

③子曰：歲寒，然後知松柏之後彫（『論語』子罕）。

④子曰：驥不稱其力，稱其徳也（『論語』憲問）。

また、唐彪は暗比題について次のように述べる。

暗比題：唐彪 曰く、凡そ題の止だ事物の上に就きて講じ、正意 隠然として其の中に寓する者は、暗比題なり。「驥不稱其力」①・「苗而不秀者」②の類、是れなり。此等の題を作るは、全篇 正意を説き出さざるも可なり。或いは開講の結尾の處に正意を説き出すも亦た可なり。若し正意を將って夾雜して講ずれば、則ち題の神を失う、と（『讀書作文譜』卷之八・五葉）。

①子曰：驥不稱其力，稱其徳也（『論語』憲問）。

②子曰：苗而不秀者有矣夫。秀而不實者有矣夫（『論語』子罕）。

路徳は『時藝話』で比體題（比喻題）を明比・暗比ということばは用いていないが、両者について次のように述べる。そして、比體題ではすべての比喻をはっきりとさせるのはよくないという。

問う凡そ比喻題を作るに應に正意を説破（明らかにする）すべきか、と。曰く、是れ盡くは然らず。須く題を見るを要すべし。……如（も）し「譬如行遠」（『大學』第十五章・第一節）①等の句を以て命題すれば、上文に明明として「君子之道」有り、安くんぞ「君子之道」を抛却し、専ら「登高必自卑」を説かんや。……「歳寒」（『論語』子罕）②章が如きは、正意は是れ「君子」を説くも、口中は却って只だ松柏を説くのみ。……〔この「歳寒」題について〕文を作るは當に正意を以て隠（かすか）に之が骨を爲すべし。萬萬も道破する可からず。道破するは、便ち作法に非ず。曩に曾て「有美玉於斯」（『論語』子罕）③を以て命題するに、諸卷 多く「懷才」・「抱道」等の語を將って、填寫して紙に滿ち、竟に〔比喻的に孔子のことを〕「有美玉於斯」と言つたのを〕「有夫子於此^マ」を説き成す。〔こうしたことは〕尤も笑う可きを覺ゆ。大凡 比喻題を作るに、正意を貪（むさぼり）發する者は、其の病根 他無し、只だ寬路に坐好し切題（題意に即する）を憚る

のみ。坊刻の小品の人を誤り、邨塾課藝の謬りを襲うこと、其の流毒 豈に窮まること有らんや、と（咸豊丁巳刊『時藝話』巻一・七十六葉）。

①君子之道，辟如行遠必自迩，辟登高必自卑（『大學』第十五章・第一節）

②子曰：歲寒，然後知松柏之後彫（『論語』子罕）。

③子貢曰：有美玉於斯，韞匱而藏諸，求善賈而沽諸。子曰：沽之哉，沽之哉，我待賈者也（『論語』子罕）。

（29）興語題

『文家模範』の説明によると、比體題は比較して述べた箇所を問題文にするのに対して、興語題は譬えで言い表わした箇所を問題文とする。

◎子曰：惡紫之奪朱也，惡鄭聲之亂雅樂也，惡利口之覆邦家者（『論語』陽貨）

興語題：興と比とは同じからず。比體は其の明暗を相して、以て正意^とを説き出す可し。興體は正意 未だ露^{あら}われず、一たび説き出すを経て、便ち下意を侵犯す。且つ比體は這箇^{これ}を説き、即ち是れ那箇^{あれ}を説き、喩を以て正に代ゆるなり。興體の若きは、這箇^{これ}を説き、却って是れ那箇^{あれ}を引起すと雖も、即ち是れ那箇^{あれ}に非ざるなり……（『文家模範』十四葉）。

（30）正喩問出題

喩と要点とがある箇所を問題文としたもの。

◎子曰：爲政以德，譬如北辰，居其所，而衆星共之（『論語』爲政）

正喩問出題：先ず喩し後に正ある，「工欲善其事」①等の題の如き者有り。先ず正ありて後に喩する，「爲政以德」②等の題の如き者有り。正・喩を平列する，「規矩方員之至」③等の題の如き者有り。……（『文家模範』十四葉～十五葉）。

①子貢問爲仁。子曰：工欲善其事，必先利其器，居是邦也，事其大夫之賢者，友其士之仁者（『論語』衛靈公）。

②子曰：爲政以德，譬如北辰，居其所，而衆星共之（『論語』爲政）。

③孟子曰：規矩・方員之至也，聖人・人倫之至也，欲爲君，盡君道，欲爲臣，盡臣道，二者皆法堯舜而已矣，不以舜之所以事堯事君，不敬其君者也，不以堯之所以治民治民，賤其民者也。……（『孟子』離婁上）。

『制義綱目』では「正喻」次のように述べる。

質して之を言するを正と曰い，借りて之を曰うを喩と曰う……（『制義綱目』不分卷・二十六葉）。

（31）游戲題

「洋洋乎」（『中庸』第十六章・第三節）・「洋洋乎」（『中庸』第二十七章・第二節）・「洋洋乎」（『論語』泰伯）と，三つの「洋洋乎」を問題文として，最後に「少則洋洋焉」（『孟子』萬章上）を問題文として提出するようなもの。

游戲題：游戲の題は，本と人の調笑（嘲笑）に供す可きもの。若し莊〔子〕の語を以て之を出せば，反って題情と合わず。但だ此等の題文 織巧に涉り易し，誠に能く法を先民（古の賢人）に取り，澤するに卷帖（書籍）を以てすれば，即ち嬉笑怒罵，亦た自ずから大雅を傷つくる無し（『文家模範』十五葉）。

『明文明二集』に游戲題を作るには八股文を読んでいるだけではできないという。

^{ママ}游戲題文を作るには，一句の老實（まじめな）の語も得ざらしむ。亦た須く游戲を以て之を出せば，情有り・趣有り，情趣 直にして，文 斯れ妙なるを説き得るべし。情趣は何れの處より生來するか。専ら時文（八股文）を読む者は能わざるなり（光緒壬午重刊『明文明二集』三十六葉）。

（32）枯窘題

題目の意図を見いだしにくい箇所を問題文としたもの。路徳の『時藝綜』では、

今の學ぶ者 一字題に遇えば，輒ち以て「枯窘」と爲し，其の爲し難きを苦

しむ（道光乙巳刊『時藝綜』巻一・二十六葉）。

という。一字題を枯窘題と同じように難解なものとしている。

◎子曰、聽訟吾猶人也。**必也**使無訟乎。無情者不得盡其辭、大畏民志、此謂知本（『大學』傳第四章）

枯窘題の法は、宜しく仰ぎて上文を承け、俯して下文に注ぎ、「必」字を緊扣（しっかりとじ込める）し、「也」字を勒住（ひきとどめる）すべし（光緒丁亥（十三年）刊『時文輯要』巻一・四葉）。

枯窘題：須らく來踪・去路を理清（はっきりする）し、以て行文の的（要点）と爲し、然る後に抒詞を布局すべし……（『文家模範』十五葉）。

『小題正鵠初集』に枯窘題の例題として、

◎**宰予**晝寢。子曰：朽木不可彫也、糞土之牆、不可朽也、於予與何誅。子曰：始吾於人也、聽其言、而信其行、今吾於人也、聽其言、而觀其行、於予與改是（『論語』公冶長）

があげられ、その總批に、

枯窘題は亦た必ず題間に尋問（搜し出す）に善からざる有れば、便ち手を下す處無し。[そこで枯窘題の]文（八股文）[作成において]は書名・作主を拈出（引き出す）す。[だから枯窘題は]確として易かる可からず。[この題目の]妙は又た上章の顔淵・子貢以て之を證するに有り……（光緒八年重刊『小題正鵠初集』九十葉）。

という。やはり、枯窘題は作りにくい題目であるとするのである。

（33）段落題

段落になっている箇所を問題文としたもの。二段落から九段落にいたるものをいう。十段落以上は、長題に分類される。

◎子曰：吾十有五而志于學、**三十而立**、**四十而不惑**、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩（『論語』爲政）

段落題：劈頭 平分にして、題の板對（一本調子の対偶句）を照らす者有

り。一段ごとに一變し、蟬聯（つらなる）の筆を以て之を運ぶ者有り。搃提搃束（すべてを持ち出したばねる）して、中間 題の分比するが如き者有り。此れ皆な正格なり。又た意を立てて分配し、那の數句を將って一類を作るあり。又た那の數句を將って一類を作り、提束分疎（持ち出し分ける）するあり。皆な其の立てる所の意に照らして闡發し、以て結構を成す者なり。 又た或いは首段を提して、下の數段を貫く、或いは末段を將って上の數段を串す、或いは中間を將って上下の數段に聯絡する者有り。〔これらは〕皆な變格なり。又た中の數段の命題を摘出する者有り、先輩の所謂ゆる偏舉題なり……（『文家模範』十五葉）。

『制義綱目』では次のように述べる。

段落題とは、題の自ら段落を分かつ者なり。或いは並列するあり、或いは串遞するあり、或いは參差するあり〔割注：意 對にして、語句 對せざるを參差と爲す〕。兩段より以て九段に至るまで皆な是なり〔割注：九段以上は長題に屬す〕……（『制義綱目』不分卷・十四葉）。

（34）全章題

大題である。ある章をひとまとめにして問題文とするもの。

◎子曰：學而時習之，不亦說乎，有朋自遠方來，不亦樂乎，人不知而不慍，不亦君子乎（『論語』學而）

もしくは、次のようにも書く。

◎子曰學而 全章（『論語』學而）

全章題：全章に二有り。一は是れ一人獨り説く者なり。一は是れ衆人問答する者なり。獨り説く者は、意に前後有り。必ず武斷の理無し……（『文家模範』十六葉）。

（35）連章題

大題である。ある箇所の數章をまとめて問題文とする。

◎孟子見梁惠王 五章（『孟子』梁惠王上）

連章題：書理 相に通じる者有り、亦た書理 各々別なる者有り、然れども既に連章を以て命題すれば、摠じて須く一氣呵成を以て妙と爲すべし……（『文家模範』十六葉）。

（36）補足・大題について

大題については、朱錦（順治十六年〔1659〕己亥科・二甲六十七名：會元〔會試の第一等及第者〕）が題目のどこに注目（結聚）すればよいのかについて、次のように述べている。

全題 單節・兩節・散亂〔割注：全題は上下無きの文なり。散亂は數節有るを謂うなり〕を論ぜず、俱に箇（ひとつ）の結聚を討（たずね）るを要す。〔それは〕或いは上、或いは下、或いは中〔割注：題の上・中・下を謂うなり。餘は此れに倣う〕、或いは虚字、或いは一字一句、或いは數字數句、是れなり。

結聚の上に在るは「學而時習之」章①の首句を重んずるが如き、是れなり。結聚の下に在るは「賢賢易色」章②の末句を重んずるが如き、是れなり。結聚の虚字に在るは「其言之作」③節の「則」字を重んずるが如き、是れなり。結聚の實字に在るは「吾日三省」章④の「省」字を重んずるが如き、是れなり。結聚の一字に在るは「慎終追遠」章⑤の「厚」字を重んずるが如き、是れなり。結聚の一句に在るは「子禽問於子貢」章⑥の「溫良恭儉」句を重んずるが如き、是れなり。結聚の數字に在るは「貧而無諂」章⑦の「可也未若」及び「其斯之謂」等の字を重んずるが如きなり。^{ママ}結聚の數句に在るは「富與貴」章⑧の「不處」・「不去」及び「無終食之間違仁」等の句を重んずるが如き、是れなり。

全題を除くの外、單句・兩句・段落・兩節・單節〔割注：亦た未だ包括せず。只だ是れ随い舉ぐるのみ〕を論ぜず、俱に上下の文より本題の結聚を想出するを要す。或いは上下 無する所の者 之を重んじ、或いは上下文

の應ずる所の者 之を重んずるのみ。

單句中の結聚は「夫子溫良恭儉讓以得之」⑨句の「得」字を以て乃ち上文の「求」字に應じて之を重んずるが如き、是れなり。兩句中の結聚は「二三子以我爲隱」二句⑩の「我」字を以て乃ち下文の「某（丘）」字に即して之を重んずるが如き、是れなり。段落中の結聚は「視思明」數句⑪の「思」字を重んじ以て上文の「綱」句に應ずるが如き、是れなり。兩節中の結聚は「巧笑倩兮」二節⑫の「爲」字・「後」字を重んじ以て下文の「禮後」の消息に通ずるが如きなり。單節中の結聚は「多聞闕疑」節⑬の「在其中」を重んじ以て上文の「干」字に應づるが如きなり。此れ皆な上下文の應ずる所の者は之を重んずるの謂いなり。其の上下文の無する所の者 之を重んずるは「君子務本」二句題⑭の「務」字■（一字不明）上下文の無する所、實に通章の關鍵なり。餘は類推す可し（朱錦〔順治十六年（1659）己亥科の二甲六十七名の進士で會元〕『墨譜』卷之一・二葉～三葉）。

- ①子曰：學而時習之，不亦說乎，有朋自遠方來，不亦樂乎，人不知而不愠，不亦君子乎（『論語』學而）。
- ②子夏曰：賢賢易色，事父母能竭其力，事君能致其身，與朋友交，言而有信，雖曰未學，吾必謂之學矣（『論語』學而）。
- ③子曰：其言之忤，則爲之也難（『論語』憲問）。
- ④曾子曰：吾日三省吾身，爲人謀而不忠乎，與朋友交而不信乎，傳不習乎（『論語』學而）。
- ⑤曾子曰：慎終追遠，民德歸厚矣（『論語』學而）。
- ⑥子禽問於子貢：夫子至於是邦也，必聞其政，求之與，抑與之與，子貢曰：夫子溫良恭儉讓以得之，夫子之求之也，其諸異乎人之求之與（『論語』學而）。
- ⑦子貢曰：貧而無諂，富而無驕，如何。子曰：可也，未若貧而樂，富而好禮者也。子貢曰：詩云，如切如磋，如琢如磨，其斯之謂與。子曰：

賜也，始可與言詩已矣，告諸往而知來者（『論語』學而）。

- ⑧子曰：富與貴，是人之所欲也，不以其道得之，不處也，貧與賤，是人
之所惡也，不以其道得之，不去也，君子去仁，惡乎成名，君子無終食
之間違仁，造次必於是，顛沛必於是（『論語』里仁）。

⑨同⑥

- ⑩子曰：二三子，以我爲隱乎，吾無隱乎爾，吾無行而不與二三子者，是
丘也（『論語』述而）。

- ⑪孔子曰：君子有九思，視思明，聽思聰，色思溫，貌思恭，言思忠，事思
敬，疑思問，忿思難，見得思義（『論語』季氏）。

- ⑫子夏問曰：巧笑倩兮，美目盼兮，素以爲絢兮，何謂也。子曰：繪事後
素。曰：禮後乎。子曰：起予者商也，始可與言詩已矣（『論語』八佾）。

- ⑬子張學干祿。子曰：多聞闕疑，慎言其餘，則寡尤，多見闕疑，慎行其
餘，則寡悔，言寡尤，行寡悔，祿在其中矣（『論語』爲政）。

- ⑭有子曰：其爲人也孝弟，而好犯上者鮮矣，不好犯上，而好作亂者，未
之有也，君子務本，本立而道生，孝弟也者，其爲仁之本與（『論語』
學而）。

おわりに

路徳は、「論篤是與，君子者乎」（「子曰，**論篤是與**，**君子者乎**，色莊者乎」『論語』先進）の題目を次のように理解して八股文を作成すべきだと述べる。

近來の風氣，若し此の題に遇えば，率ね二句滾作①の法を以て之を行なう。
截作（截もて作る）者は，十に二三も無し。若し但だ本題の八字に就きて
之を觀れば，滾作は未だ嘗て不可なることあらず。〔しかし〕題下の現に
「色莊」句有れば，則ち「君子」句は只だ半面②に係る。下句 既に半面に
屬すれば，則ち上句の神理は完ならず。凡そ題の完好ならざる者は，俱に宜
しく截法を以て之を行なうべし。題の神理 乃ち題の部位に合えば，乃ち
清なり。此の題を出す者は，下句を截去すと雖も，未だ嘗て下句を抹去せざ

るなり。此の題を作る者は、下句を見ずと雖も、亦た未だ嘗て下句を忘却せざるなり。若し截法を用いざれば、聖人の當日の説話は只だ此の二句のみなるに似たり、下意を渾涵し、其の詞を吞吐せしむと雖も、部位 既に神理を亂して全く非なり……（道光丁巳刊『時藝階』巻五・四十六葉・「論篤是與，君子者乎」条）。

①（4）二句滾作の項参照。

②「葉公問孔子於子路，子路不對。子曰：女奚不曰，**其爲人也，發憤忘食，樂以忘憂，不知老之將至云爾**」（『論語』述而）の反転文字で示した箇所が、半面題である。

路徳は、この題目を「二句滾作題」ではなく、「截下題」の解法を用いて八股文を書いていかなければならないとする。

このように、小題が出題とされるようになってくると、題目を見て、それがどの種類の題目に分類されるのかを判断することが、八股文を書くうえでの最初の作業となったのである。